論文要旨

d-2

平成 29 年 1 月 10 日

題名

氏名 持丸 結衣

竹内栖鳳の動物画

要旨

近代日本絵画が形成されていく中で、時代の流れに伴い社会の風潮が芸術にも影響を及ぼしている。その影響として派閥が存在し、東京に存在した日本美術会の保守派と日本美術院の新派、そして中立派の他に京都派がある。特に保守派と新派は対立していた。そして京都派を率いていたのが竹内栖鳳である。京都派は室町時代から続く狩野派や江戸後期から有名になった円山派などといった有力勢力の画風を土台とし、洋画などの工夫を加えて現代的な作品を作ろうとしていた。そこで栖鳳は積極的に他派の筆法や伝統を取り入れながら、流派の師祖が残した粉本を継承して描いていくという京都画壇全体に見られる形式的な伝承を否定し、古い習慣を打ち破ろうとした。その背景には明治 33（1900）年のパリ万博視察のための渡欧があった。現地で多数の美術品に触れ、教育現場に赴き、著名な画家と対談することにより西洋美術の写実性を求めて、徹底的に研究していく姿勢を知ることによって東洋の自己の内部に入り、精神世界を写す芸術を理解していったと考察する。そこで四条派の実物観察という写生画の手法を元に洋画の描法を加え、西洋と肩を並べられる作品作りに励んだのである。このような東西画法を見渡した考え方が円山四条派の写実画法などを再編成し、近代日本画を生み出した。その柔軟な思考による卓越した手腕は美術だけでなく、教育にも発揮されている。学校や私塾において近代京都派といわれる近代美人画を生み出した上村松園（1875 ～ 1949）や日本の自然の美しさを描いた小野竹喬（1889 ～ 1979）、西洋画のような独特のタッチと構図が魅力的な土田麦僊（1887 ～ 1936）らといった作家たちを育てあげていった。

本論では、主に竹内栖鳳の写生と動物画全般を中心に取り上げる。なぜ論者が栖鳳の動物画を選んだのかというと、論者が動物画を中心に作品を制作しており、動物の動きの一瞬を捉えた鮮やかな作風に感動したからである。栖鳳は四条派の画家である土田英林（生没年不明）に基礎を叩き込まれ、その後に円山四条派の正統を継いだ幸野楳嶺の私塾に入門し、「楳嶺門下の四天王」と称されるようになる。そして京都府画学校に入学して他流他派を学び、多方面の基礎を身につけた。栖鳳は実物の観察、特にモチーフと同じ目線に立つことを重要視しており、作品には「重厚感」と「跳躍」、「脈動」を感じられる。

本論は、三章構成とし、上記のような写生と動物画を中心に、第一章では竹内栖鳳の生涯について、第二章では写生と動物画の作品から感じる「生命」について栖鳳の心象を考察し、第三章では論者の研究作品に触れ、絵画の技法について述べる。

最後に以上の論点を踏まえ、それらを総括する形で、竹内栖鳳に対する論者の見解を結論として述べる事とする。

題目 外国語の場合は、日本語訳を付すこと
要旨 2,000文字程度

論文目録

d-4

平成 29 年 1 月 10 日

氏名

学位論文等

持丸　結衣

論文の題目（作品の題目）

『竹内栖鳳の動物画』

印刷公表の方法および時期

平成 29 年 3 月以降

冊数・印刷

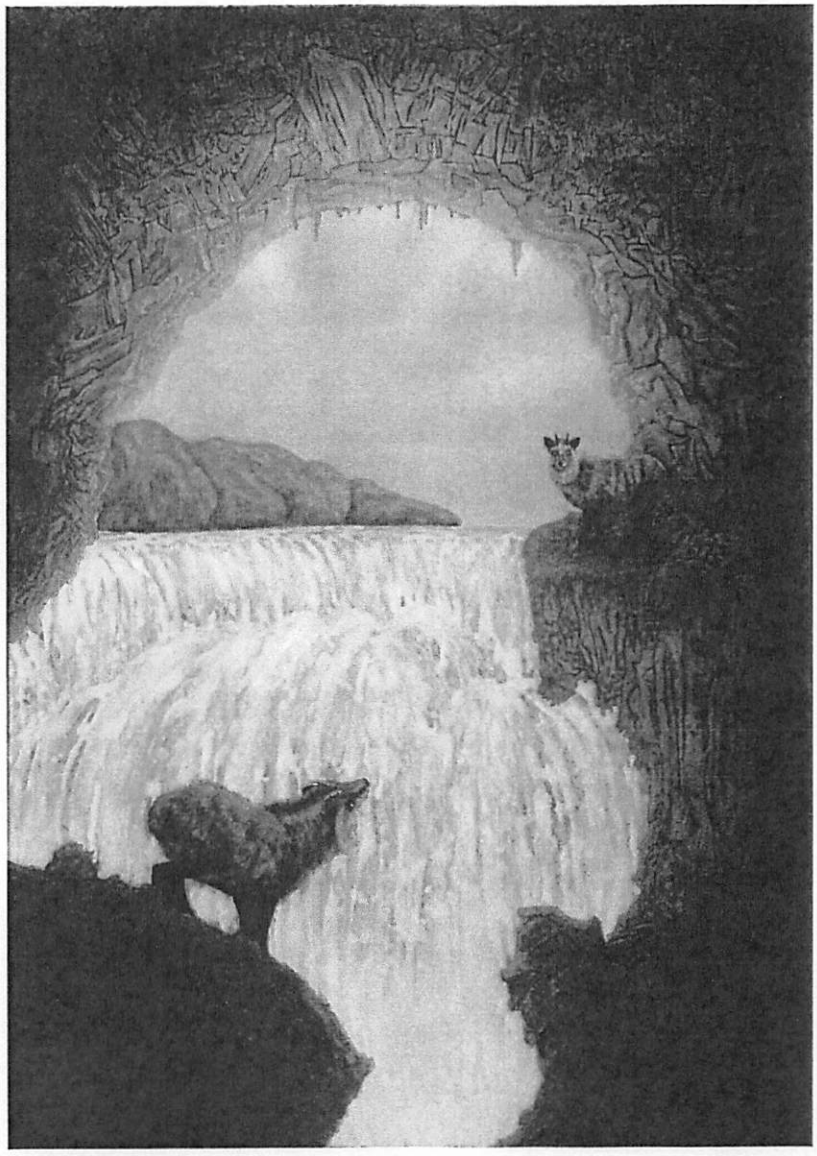
8 冊

参考論文

論文の題目（作品の題目）	単著/共著の別	発行又は発表の年月・巻・頁	発行所・発行雑誌又は発表学会等の名称	著者
『太陽神』	単	H23.9/6 ～ 11	オーロ展	本人
『反骨精神』	単	H24.8/17 ～ 29	㋮翔展 summer フェスタ＆ワークショップ	本人
『永遠の調』	単	H24.10/16~22	香椎まちなか美術館	本人
『幻像世界』	単	H24.11/1~11/6	第 2 回九州障碍者人文学芸術家連合会芸術展（優秀賞を受賞）	本人
『永遠の調』	単	H24.11/13 ～ 12/7	区役所まるっと美術館（東部地域大学連携事業）	本人
『ミノカサゴ』	単	H25.8/17 ～ 29	㋮翔展 summer フェスタ＆ワークショップ	本人
『夢喰いの昼寝』	単	H25.12/9 ～ 15	Master＆Doctor FineArt	本人
『ワダツミの怒り』	単	H25. 5 /15 ～ 27	第 65 回三斬展（入選）	本人
『夢喰いの昼寝』	単	H26.2/3~17	第 12 回 NAU21 世紀美術連立展（入選）	本人
『生態ピラミッド』	単	H26.5/4~26	第 66 回三斬展（入選）	本人
『いのち』『Lock on』	2 点	H26.11/29~30	第 2 回東区芸術祭	本人
『生態ピラミッド』	単	H26.12/8~14	Master＆Doctor FineArt	本人
『視線』	単	H27.2/4~16	第 13 回 NAU21 世紀美術連立展（入選）	本人
『海』	単	H27.5/13 ～ 25	第 67 回三斬展（入選）	本人
『虹でたね』	単	H27.11/30~12/6	Master＆Doctor FineArt	本人
『虹でたね』『生態ピラミッド』	2 点	H28.1/5 ～ 10	三斬：NextEpoch in KYOTO 展	本人
『深層世界』	単	H28.2/3 ～ 15	第 14 回 NAU21 世紀美術連立展（入選）	本人
『虹でたね』『闇の旋律』	2 点	H28.5/11~23	第 68 回三斬展（入選）	本人
『深層世界』『視線』	2 点	H28.10/13 ～ 18	福岡・新世代アートフロンティア展（入選）	本人

学位論文の題目　外国語の場合は日本語も付すこと

『闇の旋律』P120 号（1940×1120）



『目指すもの』P100 号（1620×1120）

報告書２

九州産業大学長

山 本 盤 男　　殿

d-13

平成　29 年　2 月 2 日

審査委員会

主 査　職 名　教 授
　　氏 名　松 永 洋 子　印

副 査　職 名　教授
　　氏 名　青木 幹太　印

副 査　職 名　教授
　　氏 名　渡邊 雄二　印

副 査　職 名　名誉教授
　　氏 名　工田 勝也　印

学位論文等の審査及び
最終試験・学力の結果確認報告書

1. 学位の種類

博 士 （ 芸 術 ）

2. 氏 名　持 丸 結 衣

3. 学位論文・作品の題目

論文題目:「竹内栖鳳の動物画」

作品題目:「闇の旋律」 P120号

:「目指すもの」 P100号

4. 学位論文等の審査結果の要旨

別紙 d13+ 続き 1, 2

5. 最終試験・学力の確認の結果報告

別紙 d13+ 続き 2

九州産業大学長

山本盤男　殿

d-13+

平成　29　年　2月2日

審査委員会

主査　職名　教授

氏名　松永洋子　印

学位論文等の審査結果（詳細）

d13続き－1

4－学位論文等の審査結果の要旨

持丸結衣氏の論文は、近代日本画の先駆者である京都画壇を代表する日本画家竹内栖鳳の動物画に焦点を絞り、論者が動物画を主題に日本画を制作していることから、造形的側面からと美術史的側面から、画家としての美術・造形的観点から考察した3章構成による論文である。

第1章の「竹内栖鳳の人生」では、第1節の「生い立ち」を第1項～第5項まで、幼少期、青年期、成人期、壮年期、、老年期に至るまでの生涯を詳細に調査し論述している。

栖鳳は、幕末の京都に1864年（元治元）に生まれ、1868年は明治政府樹立という激動の時代である。明治10年13歳の時、土田英林の塾に入門し写実的表現を追求していくことを学んでいる。その後、英林の勧めで、明治14年幸野楳嶺の塾に入門し、20歳で京都府画学校に入学している。楳嶺は、リアリズムを徹底して求める画家で、緻密な絵を描く人物であり、厳しく指導を受ける。楳嶺は栖鳳の才能を評価し、独自の道を歩むことを示唆した。その後、他流派の作品や古画模写や洋画の筆法を取り入れたりと独自の作品研究を行い、流派にとらわれない近代日本画の先駆者としてのゆるぎない地位を築くまでの栖鳳の生涯を詳細に論考している。

第2章の「生命をえがく」では、第1節から第4節までの構成で論じ、第1節の伝統から観る「栖鳳の初期作品」では、写生と動物画の作品から感じる「生命」について栖鳳の心象を考察している。

第1節「伝統から見る栖鳳作品」では、第1項で絵手本から見た栖鳳の初期作品について、主に植物や風景、動物の絵手本をもとに写生を行い、第2項では走獣画から動物画への移行について論述し、日本における走獣画の特徴や歴史について述べ、造形的側面からは技法や形式について、その特徴を時代を追いながら歴史的に検証している。

江戸時代末期までの流派の筆運びや構図法など定形化された表現が、江戸時代後期は動物を本物のように描くことを主眼とする新しい絵画技術へと移行していく過程を論じ、人と動物画が新しい画法によりオランダから渡来した迫真的な描画技術は、画家自身の個性や内面性を表そうとする近代的な芸術思想が生まれてくる要因となっている。徳川吉宗による輸入物の禁止緩和により蘭学が盛んになったことに起因するものである。

蘭画という西洋風の創作活動は、写実的動物画が流行し狩野派や大和絵のような日本絵画にはない濃密で迫真的な描法が、多くの画家達に制作意欲を駆り立てたと論述している。

また論者は、現代においては動物の姿に人間の感情を重ね合わせ擬人化することは普通であるが、江戸時代後期に動物単体で表情や仕草等、人の内面を重ね合わせている表現が現れた事を論じ、精神的深みを持つ動物画の表現について、造形的に考察している。

栖鳳のように徹底して正確な形態を把握し、緻密な写生は、近代において動物の存在感を表し画家の内面性や精神性の表現手段として、動物画が制作されたことを歴史的に考察をしている。

第2節「新様式への探求」は、栖鳳は英林と楳嶺の円山四条派を基本としながらもパリ万国博覧会で西欧を巡ることにより特にターナーやコローには、栖鳳は多大な影響をうけていることが明快に論じられている。栖鳳自身も「スエズ景色」という油彩画を残し、コローの柔らかい詩情あふれる風景画に深い敬慕をしている様子がわかる。

九州産業大学長

山本盤男　殿

d-13+

平成 29　年 2 月 2 日

審査委員会

主査　職名 教授

氏名　松永洋子　印

学位論文等の審査結果（詳細）

d13続き―2

岸竹堂からは、実物をしっかり観察し野性味あふれる動物の表現を体得して、伝統的日本の描法と西洋的写実表現を融合させた栖鳳の動物画の様式を確立させた過程を詳細に考察している。

第3節「本質をみつめる」では、栖鳳の絵画制作の姿勢について論じ、西欧や中国旅行で得た技法や様式を積極的に取り入れ、自分の思いや人格の修養が重要であるとの制作への姿勢を文献を詳細に調査し論じている。また、栖鳳のリアリティへの追及は、動物画の代表的作品を例にあげ、動物といかに向き合い、動物の外形に終始するのではなく、画家自身が動物とじかに接する事で、動物の実感を描こうと努めことを明確に論じている。

第4節の栖鳳作品の発展において、写生から省筆までを歴史を追い、栖鳳の原点はあくまでも写生であるが、生活の身辺や風景、西欧旅行では裸体デッサンを体験したり、晩年は俳句の影響もあり、最終的には栖鳳は枝葉末節にこだわらず、筆数を省きながら的確に対象を表現していく写生へと変化していくことを検証している。

論者は、研究成果として栖鳳の作品は西洋美術を研究し、伝統に囚われる日本画でもなく、まして西洋絵画と東洋絵画を混合するでもなく、それらの影響は影を潜め、教養をさり気なく現わした世界観と日本人的な自然観と美意識が、馴染む近代という新しい時代に呼応した新しい日本画を創造できたことを述べている。栖鳳の作品は、世界観を絵の中に閉じ込めながらも動物の躍動感や鼓動、においまでも感じさせ、観る人の心に響き時代を越えて訴えるものがあり、内側の魂を表現した作品であると日本画家としての視点で結論づけている点において高く評価できる。

持丸氏の研究作品は、論文の第3章に掲載しているものとしては「ワダツミの怒り」「生態ピラミッド」「海」「異界の門」「闇の旋律」「目指すもの」の6点で、そのうち4点は、主題として動物を表現している。

論者は日本画を制作するにあたり天然と人造の絵の具や筆について、それぞれの特徴を述べ制作上の留意点を詳細にあげ、日本画を制作する上でのそれぞれの使い方の重要性を述べている。

2016年に制作した「目指すもの」の作品制作工程を記録したものを論文に掲載し、アイデアから完成するまでを順を追い詳細に論述している。

論者の動物画は、現代に生きる若者としての感性で表現されており、今日の社会に生きる自己体験を通して得たものをテーマに制作された個性的で神秘的な作品である。公募展・三斬展に連続4年入選、NAU21世紀美術連立展など3年間連続で推薦を受け、国立新美術館で発表し、福岡アジア美術館で開催された九州華僑華人文学芸術家連合展において優秀賞を受賞している。以上のことから博士論文と関連する作品として相当とする。以上のことから博士学位論文に値する。

5―最終試験・学力の確認の結果報告

最終試験である公聴会において持丸氏は、論文の要旨と研究の特徴について適切に述べ、栖鳳が近代日本画の先駆者であり動物画に焦点を絞った内容は、十分理解することができた発表であった。作品や論文について活発な質疑応答がされ審査委員や出席者の質問に対して明確に回答がなされ博士としての学識が確認された。

以上のことから博士論文等を本学の博士（芸術）の学位に相当するものとして合格とする。